

つくるスポーツ実践における子供の学びと教師の意図

青野心音 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究では、つくるスポーツ実践における子供の学びと教師の意図について明らかにし、つくるスポーツの可能性を検討することを目的とした。そのために、「する」に焦点を当てたスポーツと「つくる」に焦点を当てたスポーツとの関わり方を対比して記し、つくるスポーツの可能性を視点として考察した。

2. 研究方法

- 1) 対象者：東京都調布市立 A 小学校第 5 学年の児童 71 名と実践者である K 教諭
- 2) 調査方法：スポーツフェスティバルで行われたつくるスポーツ実践で学んだことについてのアンケート調査と実践者である K 教諭を対象としたインタビュー調査
- 3) 分析方法：アンケート調査で得られた回答をテキストマイニングによって分析した。分析には、フリーソフト KH Coder 3 を用いた。インタビュー調査は結果を総合的に分析した。

3. 結果と考察

- 1) 子供の学びについて、テキストマイニング分析の共起ネットワーク図から 8 つに分けられた Subgraph を考察した結果、「スポーツをつくること」「スポーツをすること」「スポーツは勝敗だけではないこと」「スポーツを支えること」「達成感」の 5 つにまとめられ、これらに関する内容を学んでいたと推察された。つくることに関する学びはすることに限定したスポーツの在り方では生じない学びである。そのため、対象実践は「スポーツをつくる」というスポーツの多様な楽しみ方の内の一つを保障した

実践だと示唆された。

- 2) K 教諭の意図について、K 教諭は子供たちの実態に合ったスポーツを重視し、結果の未確定性を担保しようとしていること、本実践をスポーツの本質について考える機会の一つとし、子供の意見を汲み取って実践したことが推察された。また K 教諭は「普段から『勝敗だけではない』と話すようにする」等の指導を行っており、アプローチの数々が子供の学びに影響を与えたと考えられた。

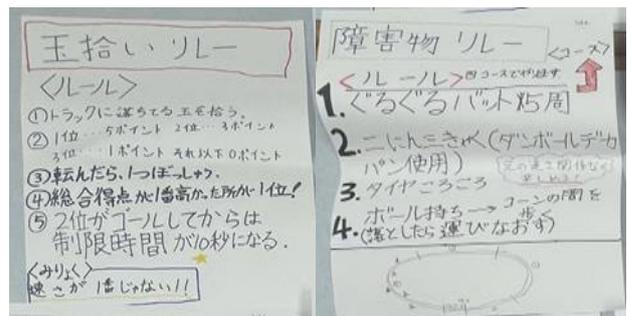


図 1 実際に子供たちが考えたリレーの一部

4. 結論

本研究のつくるスポーツ実践は、スポーツをつくる楽しさを感じられる実践であり、勝敗だけがスポーツではないことを学ぶ機会になったことが明らかとなった。教師の意図として、子供が自分たちのものだと実感できるスポーツの関わり方を大切にし、身に付けさせたいことよりも子供の必要感を重視していることも明らかとなった。そして、その考えをもとに、教師が子供の意見を汲み取ったことが学びに影響したと考えられた。

5. 主な参考文献

- 1) ピンカー, 暴力の人類史, 青土社, 2015.